

海外事務所
だより

第一三回オセアニア地方行政フォーラムおよび
第一回シドニー地方
行政交流セミナーの開催について

シドニー事務所調査役 小柳 互一（全国市長会派遣）

シドニー事務所

シドニー事務所では、オセアニアの地域レベルでの相互理解を促進し、友好協力関係の二層の強化を図るため、特定のテーマに基づくフォーラムを開催し、各国の地方行政関係者による意見交換を行っています。また、二〇〇七年度からの新規事業として、ニュー・サウス・ウェールズ州（以下、NSW州）内の地方自治体および地方行政関係団体を主な対象とした「シドニー地方行政交流セミナー」を開催しました。

オセアニア
地方行政フォーラム

この地方行政フォーラムは一九九五年にスタートし、今年度は、二〇〇七年一月二日、全豪姉妹都市協会（ASCA：Australian Sister Cities Association）との共催により、北部特別地域ダーウィン市のエンターテイメントセンターで開催しました。

このフォーラムは、最近の地方自治体を

取り巻く問題点、あるいは日本とオセアニア地域に共通する課題といったものをテーマとしています。今年度は、日豪の観光をめぐる動向に着目し、『地域の資源を活用した持続可能な観光・交流・発展・活力』をテーマとして開催しました。

また、今回のフォーラムは全豪姉妹都市協会の年次総会に併せて開催し、同総会のプログラムのうちに組み込んだため、約二〇〇人の自治体関係者や観光関係者の方々に集まっていたことができました。

当日は、エリオット・マカダム氏（北部特別地域自治大臣）の講演があり、引き続きフォーラムが開かれました。

総合同会としてアラン・マックギル氏（ダーウィン市首席行政官）に進行をお願いし、当協会



↑オーストラリア、韓国の自治体関係者と（左端が池田所長）

の上田専務理事のあいさつの後、山口忠彦氏（在シドニー日本総領事館領事）、ケリー・モイア氏（ダーウィン市議会議員・北部特別地域地方自治体協会会長）からそれぞれあいさつをいただきました。



↑あいさつする上田専務理事

折内光洋（北海道ニセコ町商工観光課長）
「ニセコ町における観光施策
（通年型観光地へ）」

折内課長の講演の概要は次のとおりです。自然環境に恵まれたニセコの観光の始まりは登山と湯治であった。ニセコ町の名前の由来となったニセコアンヌプリ周辺には、八つのスキー場がある。その中でもグランひらふスキー場にオーストラリア人が多く来ている。このスキー場は、標高一〇〇〇m程度ま

講師および講演テーマ

- ・折内光洋(北海道ニセコ町 商工観光課長)「ニセコ町における観光施策 ～通年型観光地へ～」
- ・ロス・フィンドレー (ニセコ・アドベンチャーセンター代表取締役)「ニセコ～急成長する国際観光地」
- ・ガリー・スミス (ツーリズム・レジャー・コーポレーション・クイーンズランド代表取締役)「持続可能な観光に取り組む民間企業：地方自治体との協力関係」
- ・リチャード・ドイル(北部特別地域観光局、航空・クルーズ部アジア・日本課担当課長)「世界遺産の活用～持続可能な観光を実現するために」
- ・新堀治彦 (トロピカル・ノース・クイーンズランド観光局 日本&グアム課 ジェネラルマネージャー)「日本マーケットにおけるケアンズのツーリズムマーケティング」

で照明設備があり、ナイター・スキーを楽しむことができ、レストランなども多く夜遅くまでにぎわっている。

ニセコの観光は、企業の団体旅行や家族によるスキー旅行など、冬に偏っていた。また、時代の変化とともに、団体旅行の縮小、観光におけるニーズの変化、少子化によるスキー人口の減少が大きな問題となってきた。

このような状況から、町と観光協会が夏の観光に力を入れ、観光事業者とともに通年型体験型観光への移行を目指した。体験メニューで人気なのは、ラフティング、カヌー、マウンテンバイクや熱気球など、都会では味わえない遊びが中心である。さらに、雨天の時でも対応が可能な、森で拾った木々を使うクラフト、そば打ち、ソーセージ作りやジャム作りなどのメニューもそろえた。その結果、夏の観光客数が冬の観光客数を逆転するまでに至り、二〇〇六年度のニセコ町

の観光客の入込客数は、一四八万人である。倶知安町と合わせると約三〇〇万人を数えている。

二〇〇四年ぐらゐから、ひらふ地区を中心にオーストラリアからのスキー客が増えはじめ、再びスキー場が観光を浴びるようになった。二〇〇六年にはニセコ町と倶知安町を合わせ二万九千九百人、延べ七万四千五百人のオーストラリア人が滞在した。

オーストラリア人が多くなった理由としては、①在任オーストラリア人の功績(ラフティング事業者、ツアー会社)、②現地ツアー会社の積極的な売り込み、③口コミのパワー、④豪州経済の好景気と円安、豪ドル高、⑤雪質のよさや渡航費用、時差がないなどが挙げられる。

もう一つの変化として、ひらふ地区、ニセコ東山やアンヌプリ地区で投資目的の土地の購入やコンドミニアム・別荘の建築が増えている。その一方で、屋根からの落雪、雪処理、景観に関する規制などが急務となっている。

今後は、新たな観光振興計画を策定し、ニセコ羊蹄国際リゾート都市の構築、リゾート景観づくりに向けて努力していきたい。

ロス・フィンドレー氏

(ニセコ・アドベンチャーセンター代表取締役)

「ニセコ～急成長する国際観光地」

ロス・フィンドレー氏の講演の概要は次の

とおりです。

なぜニセコが素晴らしいスキー・リゾートかというところは雪質にある。ニセコは、ヨーロッパやアメリカのスキー場よりも雪質がよい。絶え間なく雪が降り、深雪を楽しめる。また、気温もマイナス八〜九度で欧米のスキー場よりも暖かい。

もうひとつの利点は、移動距離と時差にある。ニセコに来るオーストラリア人は、日本のほかの都市に寄らず、まっすぐにニセコに来る場合が多い。それは、ニセコが欧米のスキー場に比べ、移動距離が短く、時差がほとんどないという利点を重視しているからである。

ニセコの観光を促進するためには、さらに多くの投資が必要だろう。観光客を楽しませるようなレストラン、カフェなどを増やし、道路や交通システムを充実する必要がある。

ニセコでは、大型ショッピングセンターの進出により、小規模小売店が閉鎖されている。しかし、観光はこのような小規模小売店に利益をもたらす可能性がある。なぜなら、オーストラリア人はオーストラリアや大型店舗にはないような商品を求めているからである。

ニセコの若年人口は年々減少しているようだが、観光により就労機会が増えることで、若者の流出が食い止められる。また、ニセコの自然環境を保護するためには、国、地方自治体が一体となって計画を進める必要が

ある。ニセコでは多くのビジネスが生まれているが、自然環境を保護するためには、国、地方自治体のサポートが必要である。

今後ニセコ観光協会と協力しながら事業を展開していきたい。そのためにも、観光協会は、海外からの観光客を増やすための施策や広告を拡充していつてもらいたい。

シドニー 地方行政交流セミナー

二〇〇八年二月一日、シドニー市内のホテルにおいて、「シドニー地方行政交流セミナー」を開催しました。このセミナーは、日豪の地方行政制度、地方自治体の先進的な行政実例などの講演や意見交換を通じ、日豪両国の地方自治の進展と友好親善交流の促進を図るとともに、NSW州内地方自治体との人的ネットワークの拡充を図ることを目的としています。

第一回目となる今回は、日豪における地方と中央の政府間関係の動向をテーマとし、地方分権改革推進委員会委員として活躍されている、横尾俊彦佐賀県多久市長をお招きし、日本の地方分権改革の動向をお話しただくとともに、オーストラリアの地方自治体関係者と意見交換していただきました。セミナーは、ロバート・メロー氏（シドニー工科大学 地方自治センター次長）の司会で開会し、池田氏（シドニー事務所所長）のあいさつの後、シドニー市を代表してロビン・ケミス氏（シドニー市議会議員）から来賓あいさつが行われました。

その後、池田所長からの日本の地方自治に関する説明に続き、横尾多久市長から「日本の地方分権改革の動向」と題して講演していただきました。

横尾市長からは、日本行政の課題、地方分権改革推進委員会における基本的考え方、中間取りまとめの概要、今後の取組みについてお話いただき、「今後、出先機関の統廃合の見直し、義務付け・枠付け・関与の見直しの検討、個別行政分野・事務事業の抜本的な見直しについて、激しい議論が予想される。そのような中、あらゆる可能性を探る英知を持ち、自分たちの真剣な努力を信じる心を忘れず、未知の世界へ進み出す勇気を育くみ、この変革に臨んでいきたい」と締めくくられました。

モーニングティーを挟んで、日豪における地方と中央の政府間関係の動向と題したパネルディスカッションが行われました。



↑基調講演を行う横尾多久市長

パネルディスカッション

まず、メロー氏から、豪州における地方と中央の政府間関係についての説明があり、その後、各パネリストから、それぞれの立

- モデレーター
 - ロバート・メロー氏
（シドニー工科大学 地方自治センター次長）
- パネリスト
 - ロス・ウッドワード氏
（NSW州自治省次長）
 - ロバート・ベル氏（NSW州地方自治体協会副会長・ゴズフォード市議会議員）
 - ステーブン・ブラッカダー氏
（NSW州地方自治体管理者協会特別会員）
 - 横尾俊彦氏（佐賀県多久市長）

終わりに

場において、地方と中央の政府間関係をどのように見ているかについての発言が続きました。なお、同セミナーの概要については、当事務所のホームページをご覧ください（www.jigc.org.au/）。

フォーラム、セミナーでは、それぞれのテーマについて活発に質問や意見が飛び交い、ティータイムの間にも各参加者が意見交換し有意義なものとなりました。

ご来場いただいた皆さま、また、ご協力いただいた関係者の皆さまにこの場をお借りしてあらためてお礼を申し上げます。

なお、来年度のフォーラムは、二〇〇八年四月、美しい湖と温泉で有名なニュージランドのロトルアで開催します。これまでの日本とニュージランドの関係を通じ、未来に向かつて歩むべき道、友好・交流のあり方について模索していく予定です。

海外生活 だより

シドニー事務所

サーフィン天国 オーストラリア

シドニー事務所 所長補佐 高橋 千穂 (栗原市派遣)

サーフヒストリーと プロサーファー

ラグビー、クリケット、フットボールといった球技を中心とするスポーツが盛んなオーストラリアですが、サーフィンも盛んに行われているスポーツの一つです。

長く広く続く海岸線は、起伏に富み、初心者向けのビーチ・ブレイクの緩やかな波から、上級者のみが入ることが許される浅いリーフの上で割れるハードな波まで、さまざまな波を体験することができます。

今でこそオーストラリアは、世界で最もサーフィンの盛んな国の一つと言われていますが、実際に流行し始めたのは、1950年代ころと言われており、意外に歴史は深

くありません。初めは中流階級の子弟の遊びだったようで、多くの労働階級の若者はバイクが中心だったようです。その後、あの有名なバイロン・ベイやゴールドコーストのサーファーズパラダイスにサーフィンがもたらされるようになり、今ではほとんどの州で、波乗りを楽しむことができます。

また、多くのチャンピオンがオーストラリアから輩出されており、二〇〇七年の世界プロサーフィン連盟の世界ランキングでは、男女共にオーストラリア人サーファーが一位を獲得しており、男子は上位五〇人中二人、女子は上位二八人のうち九人がオーストラリア人によって占められています。また、ボディボードにおいても、国際ボディボード協会の二〇〇七年男子のランキング一位はオーストラリア人、女子も一位こそ獲得してい

ませんが、ランキングトップ一〇のうち、三人がオーストラリア人で占められています。

二〇〇八年には、世界プロサーフィン連盟主

催の世界ツアーのうち男女共に三戦がオーストラリアで開催されることになっており、ランキングに名前を連ねるプロの技を間近に見ることができるでしょう。



↑ボディボード世界戦でのプロたち

身近なサーフィン天国

一年中、サーフィンが楽しめるオーストラリアは、北部特別地域以外のすべての州にサーフ・ポイントがあります。特にシドニーのあるニュー・サウス・ウェールズ州は、クイーンズランド州のゴールドコーストと並び、国内有数のサーフ・スポットと言えるところです。

シドニーのような都会からも、電車やバスといった公共機関を乗り継いで簡単に海へ行くことができるため、サーフィンは手軽にできるスポーツの一つです。また、一度覚えてしまえば、多少ブランクがあっても波に乗る感覚を取り戻すことができるため、親子で波乗りを楽しんでいる人も多く見受けられます。

私が住んでいるシドニー東部のボンダイ地区には、ボンダイ・ビーチ、タマラマ・ビーチ、ブロンテ・ビーチ、クージー・ビーチと四つのビーチが並んでいます。週末や休暇ともなれば、多くの海水浴、日光浴をする人でにぎわい、ひとたび南からの低気圧の影響で波が上がると、多くのサーファーたちで混雑します。

この東部地区以外にも、シドニーから北へ向かえば、セントラル・コーストと呼ばれるサーフ・スポットが点在し、ニューカッスル、ポート・マッコリー、コフス・ハーバー、バイロン・ベイとゴールドコーストまでの約九〇〇kmまでの間にあちこちで波乗りができ、南に向かえば、車で一〜三時間の距離でクロヌラ、ウーロンゴンといった有数のサーフ・スポットにアクセスが可能です。まさにオーストラリアはサーフィン大国、といった言葉を肌で感じることができます。

笑顔のオージーと手強い波

シドニー赴任当初は、秋から冬へと季節が移り変わる中で、なかなか海へ足が向きませんでしたが、春（こちらの季節で10月ごろ）、徐々に暖かくなってきたこともあり、週末は海で過ごすことが多くなりました。

実際、海に入ってみると、天気はよく、風も穏やかで、Tシャツにショートパンツでも快適な陸上ですが、海水の温度は低く、

ウェットスーツ（フルスーツ）が必要でした。皮膚感覚の違うオージーは、トランクス一枚水着で入っている人もたくさんいます。

海の中では、入っている人みんな笑顔で迎えてくれます。確かに、ローカル優先だとか、ワンマン・ワンウェイといった世界共通のサーフィンのルールもありますが、日本のように、ガツガツと険しい表情で波を独り占めするような人はいません。時には一本の波に数人が乗ってしまうこともありませんが、「Sorry」の一言でみんな笑顔で沖へ戻って行きます。

ただ、波が高くなれば、それだけ危険も増えます。年末には夏だというのに、珍しく波が上がりが（波が上がる＝低気圧の影響なので、通常、晴れて高気圧が張り出している夏には珍しい）、頭オーバー（岸から見たサイズを身体の部位で測る）の波に出会うことができました。私も嬉々として海へ入りました。しかし、沖に向かうために懸命にパドリングやキッキングをしますが、どんな自分の行きたい方向とは違う方へ流され、自分の体力や技術のなさをあらためて感じました。この時は、一五分〜二〇分かけて沖へ出て、ものの三分でビーチに戻されてしまうことの繰り返しでした。大きなうねりが入って波が上がった時には、ライフセーバーの監視の下にサーフィンができ、ある意味、安全とも言えますが、自分の身を守り、周りに迷惑をかけないためにも、自分の力を過信しないことが大事だと思いました。

Let's Surf!!

一口にサーフィンと言っても、波に合せて上下に動き、さまざまな技を入れるショートボード、比較的穏やかでメローな波に適したロングボード、ショートボードやロングボードといった長い板では乗れないような急角度の波を滑るボディボードなど、波乗りのバリエーションもさまざまです。波に合わせて板を変えて楽しむ人、一つの形にこだわって波乗りする人と、楽しむスタイルも人それぞれ。これからも、自分のスタイルを追求しながら波乗りを楽しんでいきたいと思えます。

また、サーフィンを通して、ビーチ・クリンに参加するなど環境にも目を向けることができ、時にはイルカや海ガメに出会えることもあります。

シドニー近郊のビーチでは、初心者向けのサーフィンレッスンも盛んです。皆さんもシドニーにお越しの際は、ぜひサーフィンに挑戦してみてください。いかがでしょうか。



↑ボンダイ・ビーチでサーフィン